

## 対人援助職者における感情体験の社会的共有が感情状態に与える影響

森本寛訓

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 子ども医療福祉学科

(令和元年9月25日受理)

Effect of social sharing of emotions on the affective states of human care service professionals

Hiromichi MORIMOTO

*Department of Medical Welfare for Children,*

*Faculty of Health and Welfare,*

*Kawasaki University of Medical Welfare*

*(Accepted on September 25, 2019)*

### 著者抄録

本研究の目的は対人援助職者の感情体験であるポジティブ、ネガティブ職業生活出来事 (PWLEとNWLE) の社会的共有が、彼らのポジティブ、ネガティブ感情 (PAとNA) とうつで代表される感情状態に与える影響について検討することであった。そのため社会的共有をPWLE、NWLEの開示行動 (PWLE-D、NWLE-D) と、それらに対する応答行動 (PWLE-R、NWLE-R) で捉えた。また社会的共有がPAとNA、およびうつに与える影響をWithinレベルとBetweenレベルに分けてモデル化し、分析した。この研究では看護師、介護福祉士、保育士の3職種からなる対人援助職者180人に4波からなるWeb調査を実施した。調査で得られたデータをマルチレベル構造方程式モデリングによって分析した。分析結果より、PWLE-DとPWLE-Rからなる社会的共有はWithin、Betweenの両レベルでPAの状態を高め、うつ状態を低める傾向が示された。さらにNWLE-DとNWLE-Rからなる社会的共有では、NWLE-Rを媒介しない時には両レベルでNAとうつの状態を高める傾向が認められたが、NWLE-Rを媒介する時にはWithinレベルではNAとうつの状態を高め、BetweenレベルではNAとうつの状態を低める傾向があると示唆された。

キーワード：対人援助職者、感情体験の社会的共有、ポジティブ・ネガティブ感情、うつ、マルチレベル構造方程式モデリング分析

### Abstract

This study investigated the effects of social sharing of the emotion by assessing Positive and Negative Work Life Events (PWLE and NWLE) on Positive, Negative affect (PA, NA) and depression states in human care service professionals. Social sharing was viewed in terms of the service professional's PWLE and NWLE Disclosure (PWLE-D and NWLE-D), with Responses to PWLE-D and NWLE-D (PWLE-R and NWLE-R). The effects of social sharing on PA, NA and depression states were modeled and analyzed at Within and Between levels. A survey of four times inquiries was conducted, with 180 human care service professionals consisting of three occupations nurses,

certified care workers and nursery teachers. The data was analyzed by multilevel structural equation modeling. Results suggested that social sharing, involving PWLE-D and PWLE-R, increases PA and decreases depression states in Within and Between levels. When NWLE-R is not a mediator, social sharing involving NWLE-D and NWLE-R increases NA and depression states in Within and Between levels. When NWLE-R is a mediator, social sharing increases NA and depression states in Within levels, but decreases in Between levels.

**Key words:** human care service professionals, social sharing of emotions, positive or negative affective states, depression, multilevel structural equation modeling analysis

## 1 序 論

### 1.1 背景

看護や介護、保育など、対人援助サービスに対する社会的要請の高まりは今や明らかどころである。これに応えるべく我が国ではその人材を確保するための施策が整備されつつある<sup>1)</sup>。このような施策と同時に検討しなければならないのは、看護、介護、保育の人材である対人援助職者が、自身の職業生活を健やかに過ごせるようにする工夫である。対人援助職者がうつ等の感情状態に陥りメンタルヘルスを損ないやすいのは、これまでに多くの研究で指摘されてきた<sup>2)</sup>。これらの研究では、その指摘と合わせていくつかのキーワードを軸に上記の感情状態について議論されている。

対人援助職者の感情状態と関連して取り上げられる代表的なキーワードに感情労働がある。感情労働は「公に観察可能な表情や身体表現のために自らの感情を管理する労働」と定義され<sup>3)</sup>、顧客などの他者と向き合うときに相応しい精神状態を生み出し維持するべく、自身の感情を誘発または抑制することが求められる職種にその機会が多いとされる。向き合う他者を対人援助場面での被援助者とすれば、感情労働は対人援助職者にとって日常業務の一つといえる。

感情労働に従事する対人援助職者は情緒的消耗感などの症状を含むバーンアウト状態に陥り

やすいため<sup>4)</sup>、感情労働は彼らの感情状態について検討する際に重要なポイントとなる。また、感情労働のような対人援助職者自身の感情状態に係る普段の体験や行為に着目すれば、彼らにとって身近な視点から感情状態に対する示唆が得られるため有益であるといえる。例えば感情労働時の一形態といえる共感疲労と共感満足において<sup>5)</sup>、趙<sup>6)</sup>は共感疲労(例：援助している人たちのトラウマとなるストレスが、こちらに移ったかもしれないと思う<sup>註1)</sup>)を体験していても共感満足(例：自分が援助している人たちと関わることで、非常に多くの満足を得ている<sup>註1)</sup>)が高ければ、バーンアウトの危険性は弱まる可能性を指摘している。さらに関谷・湯川<sup>7)</sup>は感情労働の側面である感情的不協和(例：本当は違うのに、クライアントの前で明るく振る舞うことがある)に焦点を当て、それを筆記開示することがバーンアウトの抑制に貢献する可能性を報告している。両者とも対人援助職者自身の普段の体験または行為といえる感情労働を取り上げるため、対人援助職者にとって親しみやすい示唆になると考えられる。

感情労働と同様に対人援助職者自らの感情状態が関連する日常的体験や行為は他にもある。本研究ではこのような体験、行為として、感情体験の社会的共有を取り上げる。なお以降で感情状態とは「憂うつだ」「悲しいと感じる」といった感情自体の特徴のみで表される状態を指し、感情状態と関連する具体的エピソードを感

注1 趙<sup>6)</sup>が共感満足・疲労を測定するために使用した「援助者のための共感満足/疲労の自己テスト短縮版<sup>註1)</sup>」の項目を例として引用した。

情体験とする。

チーム医療という理念があるように、医療場面では様々な専門性を身につけた対人援助職者が多様な情報を共有し、互いに連携して医療を提供することが推進されている<sup>8)</sup>。また、情報の共有や相互の連携は対人援助職者が従事する他の分野においても、スタッフ間の協働や、相互の支え合いの中で常に行われている<sup>9,10)</sup>。対人援助職者が互いに連携する際に共有する情報には、職務に関する伝達事項に加え、職業生活の中で体験した私的内容も含まれると推測する。ここで特に、自身の感情体験を他者と共有する行為を感情体験の社会的共有という。感情体験の社会的共有は、感情体験に関する開かれたコミュニケーションと定義され<sup>11)</sup>、会話等の手段により社会的に共用された言語において感情体験を再喚起する特徴を持つ<sup>12)</sup>。また他にも、様々な感情体験が社会的共有を誘発することに加え<sup>13)</sup>、社会的共有によってポジティブな感情体験は十分に活かせるようになり、ネガティブな感情体験からは回復して、各感情状態の調整に貢献するという特徴もあるとされる<sup>13-15)</sup>。

本研究では対人援助職者の日常的行為といえる感情体験の社会的共有に着目し、彼らの感情状態に与える影響について調査を行う。具体的にはGableとReis<sup>16)</sup>を参考にして、社会的共有を対人援助職者が自身のポジティブまたはネガティブな感情体験を周囲の職場スタッフに伝える開示行動と、それに対する職場スタッフからの応答行動で捉えて調査する。そして、このような開示、応答行動がいかにポジティブ、ネガティブ感情状態（Positive, Negative Affect：以下、PAまたはNAとする）と、両者で説明される<sup>17)</sup>に影響するか分析、検討を行う。

今回の研究において対人援助職者のポジティブ、ネガティブ感情体験は、彼らのPA、NAと関連する職業生活上のエピソードである<sup>18)</sup>の

ポジティブ、ネガティブ職業生活出来事（Positive, Negative Work Life Events：以下、PWLE, NWLEとする）で捉えた。さらにポジティブ、ネガティブ感情体験の開示行動はPWLE, NWLEの開示行動（PWLE, NWLE Disclosure：以下、PWLE-D, NWLE-Dとする）とし、またポジティブ、ネガティブ感情体験の開示行動に対する応答行動はPWLE-D, NWLE-Dへの応答行動（Responses to PWLE-D, NWLE-D：以下、PWLE-R, NWLE-Rとする）とした。

## 1.2 PA、NAに対する社会的共有の影響

本研究では社会的共有に関するそれぞれの概念について体験頻度の評定値が得られることを前提として、まずモデル1とモデル2（図1）を設定した。モデル1、2ではPWLE-DとPWLE-R、またはNWLE-DとNWLE-Rで構成される社会的共有が、PWLEからPA、またはNWLEからNAに与える影響と仮定した。加えて、これら社会的共有の影響関係を表すモデル1、2の各概念は、対人援助職者の個々において日常的に体験される側面を持つと考える。このような体験傾向は、個々の対人援助職者内での日常的傾向にあたるWithinレベルと、対人援助職者間の集団的傾向に該当するBetweenレベルに分けて分析する必要があると考える。なお、社会的共有の先行研究においてもWithinとBetweenのマルチレベルに分けて分析が行われている<sup>19,20)</sup>。モデル1、2では上記の各レベルで概念間の影響関係を仮定した。

はじめに筆者らの研究成果<sup>18)</sup>から、PWLEとPA、そしてNWLEとNAには正の相関関係が認められると考えた。よって、モデル1、2ではWithinとBetweenの両レベル、すなわち対人援助職者内の日常的傾向、および対人援助職者間の集団的傾向として、PWLEまたはNWLEの体験頻度が高いと評定されるときにPAまた

はNAの体験頻度も高く評定されると推測して、モデル1のPWLEからPAへのパス、さらにモデル2のNWLEからNAへのパスは両レベルで正の影響関係を仮定した。また、モデル1, 2のPWLE-DからPWLE-RへのパスとNWLE-DからNWLE-Rへのパスでは、ポジティブおよびネガティブな感情体験はそれに関する開かれたコミュニケーション、つまり開示、応答行動の両者を誘発することから<sup>13)</sup>、両レベルで正の影響関係を仮定した。上記の各パスは対人援助職者内の日常的傾向と対人援助職者間の集団的傾向として、PWLE-DまたはNWLE-Dの体験頻度が高いと評定されると、PWLE-RまたはNWLE-Rの体験頻度も高いと評定される状況を表している。

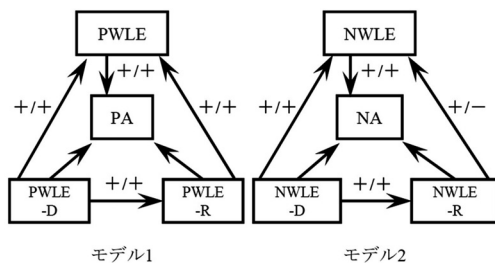


図1 PWLE-D, PWLE-R, またはNWLE-D, NWLE-Rの社会的共有が、PWLEおよびPA, またはNWLEおよびNAに与える影響をWithinとBetweenレベルで仮定したモデル1, 2。

注) 各パスに付記された「+」は正の影響関係、「-」は負の影響関係を仮定していることを示す。「/」をはさみ左側はWithinレベル, 右側はBetweenレベルの仮定を表す。

次にモデル1のPWLE-DからPWLEへのパス、そしてPWLE-RからPWLEへのパスでは、WithinとBetweenの両レベルで正の影響関係を仮定した。まず前者のパスについて、Lang

ston<sup>15)</sup>はポジティブ感情体験の開示行動はPAを増大させるとし、その理由の一つに開示行動がポジティブな感情体験を記憶しやすくすることを指摘している。さらにBryantら<sup>14)</sup>はポジティブ感情体験の開示をPAの自己制御「savoring」の手段として捉え、その目的の一つにポジティブ感情体験の記憶構築を挙げている。よってPWLE-Dの体験頻度が高いと評定されるとPWLEに対する想起性が向上し、結果としてPWLEの体験頻度も高いと評定されると推測する。この推測は対人援助職者内の日常的傾向ならびに対人援助職者間の集団的傾向として成立すると考える。

後者のパスについては、Gableら<sup>19)</sup>はポジティブな感情体験を話した相手の種類（友人やルームメイトなど）が増えると、その体験を想起しやすくなることを報告している。またReisら<sup>20)</sup>はポジティブな感情体験に対する熱心な応答を知覚すると、その感情体験はよりポジティブに評価されると報告している。これらの報告より、PWLE-Rの体験頻度が高いと評定される時には、応答者の種類が増えてPWLEは想起されやすくなることに加え、PWLEのポジティブさはより評価されて、結果的にPWLEの体験頻度も高いと評定されると推測する。なおGableら<sup>19)</sup>とReisら<sup>20)</sup>ではWithinレベルに焦点が当てられておりBetweenレベルは検証されていない。しかし本研究では両レベルにあたる対人援助職者内の日常的傾向と対人援助職者間の集団的傾向として先の推測は成立すると考える。

モデル2では、まずNWLE-DからNWLEへのパスにおいてWithin, Betweenレベルの両者で正の影響関係を仮定した。改めて説明すると、NWLE-Dはネガティブな感情体験の開示行動であった。本研究では口頭での開示に着目しているが、類似するものに筆記による開示が挙げられる。トラウマに代表されるネガティブな感情体験の筆記開示がその体験の解消に効果



があることは、Pennebaker<sup>21)</sup>を初めとする多くの研究で確認されており、本稿の初めに紹介した対人援助職者を対象とする研究<sup>7)</sup>でも筆記開示の有効性は認められている。ただし、上記の効果は継続的な試行によってネガティブな感情体験を十分に言語化し、馴化や認知的再体制化が促進されることで成立するとされる<sup>22)</sup>。一方、対人援助の現場では、NWLEを十分に言語化して馴化や認知的再体制化が促されるだけの開示を行う余裕はなく、むしろNWLE-DのみではNWLEが再喚起されるに留まると考える。よってNWLE-Dの体験頻度が高いと評定される時には、開示されたNWLEの印象が強くなり、NWLEの体験頻度も高いと評定されやすくなると推測する。また、この推測は対人援助職者内の日常的傾向と対人援助職者間の集団的傾向として成立すると考える。

次に、NWLE-RからNWLEへのパスについて、Withinレベルでは正の影響関係を、Betweenレベルでは負の影響関係を仮定した。Rime<sup>13)</sup>はネガティブな感情体験には社会的共有に対してsubtle impactとobvious impactという2種類の影響力があることを指摘している。初めに、subtle impactは個々で幼少期に形成された愛着に由来する社会との情緒的な関わりへの欲求「socio-affective needs」を刺激して社会的共有を促すとしている。それに伴い、ネガティブな感情体験の開示者は周囲からの応答を受領し、慰めや気づかい等を受けてその感情体験から救済される可能性を示唆している。また、obvious impactはネガティブな感情体験に対する認知の変容を促す社会的共有をもたらすとしている。そのため開示者は認知変容を導く応答行動を受領して、その感情体験から回復する可能性を指摘している。なおsubtle impactに対する社会的共有ではその救済が一時的であるため、開示者は再度ネガティブな感情体験に直面するようになることも指摘している。

したがって、まずsubtle impactは個別の心理体験である愛着と関連したsocio-affective needsを刺激するため、このときの応答行動はWithinレベルでの体験と想定する。さらにsubtle impactへの社会的共有ではネガティブな感情体験に再び直面することになるとの指摘から、今回の調査対象者において日常的にNWLE-Rを体験していたと評定されると、NWLEの内容は再認識されやすくなると推測する。このことと関連して、Reisら<sup>20)</sup>は日誌法による縦断的調査の結果から、ネガティブな感情体験に対する応答（サポート）を知覚することで、Withinレベルでその体験へのネガティブな評価は増大したと報告している。一方、obvious impactへの社会的共有を検証したNilsとRime<sup>23)</sup>は、被験者間実験計画において認知変容を導く応答がなされた群に持続的なNAの低減が認められたと報告している。したがってobvious impactに対する社会的共有の結果はBetweenレベルで確認されると想定する。そして、本調査でNWLE-Rをより多く体験したと評定した調査対象者は、それを少なく体験したと評定した者に比べ、NWLEをネガティブな感情体験として認知することが少なくなり、その感情体験から回復すると推測する。

以上より、本研究ではNWLE-Rの体験頻度が高いと評定されるときに、Withinレベルの対人援助職者内の日常的傾向としてはNWLEの体験頻度も高いと評定されるが、Betweenレベルである対人援助職者間の集団的傾向としてはその体験頻度は低いと評定されると推測する。

最後に、モデル1、2の分析はPWLE-DとPWLE-Rの各々からPAへのパスと、NWLE-DとNWLE-Rの各々からNAへのパスも設定して行った。ただし、これらのパスで表される影響関係は、上記で仮定したPWLEまたはNWLEを媒介する影響関係によって説明されると予測し、正負の傾向は仮定しない。

### 1.3 うつに対する社会的共有の影響

筆者ら<sup>24)</sup>はうつの感情面がPAとNAで説明されること<sup>17)</sup>を踏まえ、PWLEとNWLEがPAとNAを経由してうつに影響することをパス解析によって明らかにした。この研究ではPWLEとNWLEからうつまでの各パスをWithinレベルとBetweenレベルに分けて検討していないが、PWLEからうつへは負、NWLEからうつには正の有意な間接効果が認められることを報告した。この研究結果より、本研究ではモデル1のPA、モデル2のNAをうつに置き換えてモデル1、2を統合し、社会的共有がうつに与える影響も分析した。分析を行うにあたり、PWLEおよびNWLEからうつへのパスはWithin、Betweenの両レベルとも前者は負、後者は正の影響関係を仮定した。すなわちPWLEの体験頻度を高いと評定するとうつの体験頻度は低いと評定し、またNWLEの体験頻度を高いと評定するとうつの体験頻度も高いと評定することが両レベルで推測される。さらに他のパスについてはモデル1、2の分析結果を踏まえて正負を仮定し、以降の「3. 結果と考察」でモデル3(図3)として分析、検討した。

### 1.4 研究目的

以上より本研究ではモデル1、2、3を用いてPWLE-DとPWLE-R、およびNWLE-DとNWLE-Rで構成される社会的共有がPAとNA、そしてうつ与える影響をWithinとBetweenレベルに分けて分析し、検討することを研究目的とした。

## 2 方法

### 2.1 調査対象者

調査会社のモニター会員より、所属する職場に1年以上勤務している看護師、介護福祉士、保育士の有資格者が選ばれた。そのうち回答内

容に著しく偏りのあった10人を除く、看護師63人、介護福祉士70人、保育士47人、計180人を本調査の対象者とした。なお、全回答のうち3分の2よりも多い回答で同一の評定値が与えられていた場合に、回答内容に著しく偏りがあると判断した。

調査対象者の平均年齢(標準偏差)は、看護師が39.4歳(8.8)、介護福祉士が39.8歳(9.0)、保育士が39.2歳(9.6)であった。性別人数は、看護師が男性9人、女性54人、介護福祉士が男性40人、女性30人、保育士が男性2人、女性45人であった。さらに現職場での平均勤務年数(標準偏差)は、看護師が6.7年(7.2)、介護福祉士が6.2年(4.5)、保育士が8.9年(8.6)であった。

### 2.2 倫理的配慮

本研究は川崎医療短期大学倫理委員会で2014年5月に審査を受け承認を得た後に行われた。

### 2.3 調査時期と手続き

本研究のモデルで仮定したWithin、Betweenレベルの影響関係を検討するために、4波からなるパネル調査によりデータを取得した。具体的には、2015年11月から12月までの1ヵ月間に調査会社から調査内容を示したWeb画面が調査対象者に週に1回ずつ計4回配信され、調査参加への同意者はWeb画面上で回答し、送信した。なお調査参加への同意は、1回目調査におけるWeb画面のフェイスシート部分で調査対象者に説明した上で確認した。

### 2.4 調査内容

調査した内容を以下の(1)(2)(3)に示す。

(1) PWLEとNWLEは我々の研究<sup>18)</sup>で報告された項目に加筆して測定した<sup>註2)</sup>。PWLE-DとPWLE-R、およびNWLE-DとNWLE-Rは、加筆

されたPWLE, NWLE項目を基に本研究のために作成した項目で測定した。PWLEは15項目, NWLEは17項目, またPWLE-D, NWLE-D, NWLE-Rはそれぞれ6項目, PWLE-Rは12項目である。なおPWLEを含む各概念について, PWLE-Rは4領域, それ以外は2因子もしくは2領域を想定して, それぞれを代表する項目が作成された。ただし今回の研究ではそれらの因子, 領域の区別はせず各項目を活用した。上記項目の代表例を表1に示す<sup>注3</sup>。

この調査では (a) 初めにPWLE, NWLEの各項目について, 調査日の前週にあたる1週間の体験頻度を4段階(1:まったくなかった, 2:あまりなかった, 3:ときどきあった, 4:しょっちゅうあった)で評定させた。(b)次に (a) で2以上の評定値が与えられたPWLEまたはNWLE項目のうち, 最も重要と判断された1項目に関するPWLE-DまたはNWLE-Dの体験頻度を評定させた。評定期間と評定値は (a) と同様にした。(c)最後に (b) で2以上の評定値が与えられたPWLE-DまたはNWLE-D項目から, 最も重要と判断された1項目に対するPWLE-RまたはNWLE-Rの体験頻度を評定させた。評定期間と評定値は (a) (b) と同様にした。上記の (b) (c) では評定の簡便さに配慮して, PWLE, NWLE項目と, PWLE-D, NWLE-D項目の各々から, 最も重要と判断された1項目を選定させている。その1項目のデータと各々の合計点を相関分析した結果, 相関係数はいずれも.322以上 ( $p < .01$ ) となり, 中程度以上の効果量<sup>25)</sup>認められた。したがって, 最も重要と判断された1項目のデータは各々の合計点を代表しているとし, 後の分析を進めた。

(2) PAとNAは筆者らの既報<sup>24)</sup>でも用いた日本語版PANAS<sup>26)</sup>によって測定した。各項目の評定期間と評定値は (1) と同様にした。

(3) うつは日本語版CES-D<sup>27)</sup>によって測定し

表1 PWLE, NWLE項目とPWLE-D, PWLE-R, NWLE-D, NWLE-R項目の代表例

PWLE	職場スタッフのサポートがあった。 困難な仕事をやり遂げた。
NWLE	職場スタッフに気がついた。 職場で急に柔軟な対応を求められた。
PWLE-D	PWLEを体験して, うれしかったので, その気持ちを職場スタッフに打ち明けた。 PWLEを体験して得られたことを, 職場に広めるために, 職場スタッフへ伝えた。
PWLE-R	その職場スタッフは, 私に共感して, 話を聞いていた。 その職場スタッフは, PWLEについて, お互いに理解を深めようとして, 話を聞いていた。 その職場スタッフは, 私を肯定しようとして, 話を聞いていた。 その職場スタッフは, PWLEから, 情報を収集しようとして, 話を聞いていた。
NWLE-D	NWLEの体験がショックだったので, その時の気持ちを, 職場スタッフに聞いてもらった。 体験したNWLEに, 対処するために, 職場スタッフに話した。
NWLE-R	その職場スタッフは, 私を受容しようとして, 話を聞いていた。 その職場スタッフは, 私に協力しようとして, 話を聞いていた。

注) 本調査のデータで体験頻度の合計が最上位となった項目を掲載した。具体的には, PWLEとNWLEはそれぞれの各因子において最上位になった項目を, またPWLE-D, PWLE-R, NWLE-D, NWLE-Rは項目作成時に想定した各領域で最上位となった項目を掲載した。なおPWLE-Rは4領域, それ以外は2因子もしくは2領域を想定して各々を代表する項目が作成された。したがってPWLE-Rのみ4項目を掲載した。また, PWLE-D, PWLE-R, NWLE-D, NWLE-Rの各項目に含まれるPWLEとNWLEは, 調査方法に従いPWLE, NWLEの具体的項目を適宜使用した。

た。日本語版CES-Dはうつ症状を表す20項目(4項目は逆点項目)で構成される。この尺度にはうつの感情面だけでなく認知, 身体反応を測定する項目も含まれる。ただし, 各項目の内

注2 これらの項目はPWLEとNWLEがうつに与える影響を検討した筆者ら研究<sup>24)</sup>でも報告されている。

注3 PWLEとNWLEの項目に加え, 表1に掲載されている各概念の全項目は著者への連絡により入手可能である。

容はうつ症状として別々ではなく相互に作用していると考えられたため、本調査では全項目を用いた。それぞれの項目の体験頻度を島ら(1985)に準じ4段階(0:この1週間で全くないか、あったとしても1日も続かない, 1:週のうち1-2日, 2:週のうち3-4日, 3:週のうち5日以上)で評定させた。

## 2.5 データの整理と分析方法

調査で得られたデータは各調査回で概念ごとに合計して得点化した。その後、モデル1, 2, 3をマルチレベル構造方程式モデリング(Multilevel Structural Equation Modeling:以下MSEMとする)によって分析した。MSEM分析にはMplus version 7.4を用いた。

## 3 結果と考察

### 3.1 モデル1, 2, 3における各概念のデータの階層性と相関関係

MSEM分析を行うにあたり、モデル1, 2, 3に含まれる各概念のデータの階層性を確認するため級内相関係数とデザインエフェクトを算出した<sup>28,29)</sup>。その結果、級内相関係数は調査対象者のどの職種のデータでも.100以上( $p < .01$ )となった。デザインエフェクトは保育士データでのNWLE-Dについて1.993であったが他はすべて2以上となった。よって全概念のデータに階層性があるということが可能で、マルチレベルによる分析は妥当と考えられた。

次に、モデル1, 2における概念間の相関係数をマルチレベル相関分析によって算出した<sup>28,29)</sup>。看護師, 介護福祉士, 保育士の各々のデータで分析を実施したが、いずれも同等の相関関係が認められた。よって全職種データによる分析結果に着目した。全職種データでの相関係数は表2で示している。

表2 モデル1, 2の概念間におけるマルチレベル相関係数

	PWLE-D	PWLE-R	PWLE	PA
PWLE-D	—	.534 **	.457 **	.159 **
PWLE-R	.898 **	—	.488 **	.248 **
PWLE	.747 **	.849 **	—	.358 **
PA	.449 **	.507 **	.661 **	—
	NWLE-D	NWLE-R	NWLE	NA
NWLE-D	—	.372 **	.358 **	.155 **
NWLE-R	.778 **	—	.273 **	.119 **
NWLE	.477 **	-.087	—	.279 **
NA	.576 **	.183 **	.762 **	—

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

注) 上三角行列はWithinレベル, 下三角行列はBetweenレベルの相関係数である。

まず、モデル1の概念間ではWithinとBetweenの両レベルで全ての相関係数が有意であり、かつ各係数から正の相関関係が確認された。PWLE-D, PWLE-Rの各々とPAの間においても両レベルで有意な結果が得られたが、これらはモデル1においてPWLEを媒介する影響関係によって説明されると考える。モデル2の概念間ではBetweenレベルのNWLE-R, NWLE間の相関係数以外は両レベルで全て有意であり、かつ正であった。BetweenレベルのNWLE-RとNWLEの相関係数は有意ではなかったが負となり、モデル2のNWLE-RからNWLEへのパスで仮定した影響関係の符号と一致していた。また、同レベルのNWLE-RとNAの相関係数もモデル2でのNWLEを媒介する影響関係から負になると予測されたが、そうではなかった。これはBetweenレベルにおいてNWLE-DとNWLE-R, およびNWLE-DとNAに有意で中程度以上の正の相関関係が認められたのが一因と考えられる。なお、NWLE-DとNAの相関関係は両レベルともモデル2でNWLEを



媒介する影響関係によって、さらにWithinレベルのNWLE-RとNAの相関関係はモデル2のNWLEを媒介する影響関係によって説明されると考える。

最後にモデル1, 2を統合して構成されるモデル3の相関関係について述べる。まず、モデル3で新たに設定されたPWLE, NWLEとうつの関係についてマルチレベル相関分析を実施した。先ほどと同じように3職種の各データも分析したが、いずれも同等の相関関係が認められたため全職種データによる分析結果を報告する。表3に示したように、PWLEとうつにおいてWithinレベルでは有意傾向の、Betweenレベルでは有意な負の相関関係が認められた。一方、NWLEとうつの間では両レベルで有意な正の相関関係が認められた。これらの結果は我々の既報<sup>24)</sup>をもとに仮定したパスの正負を支持していた。

表3 モデル3のPWLE, NWLEとうつとのマルチレベル相関係数

	PWLE	NWLE
うつ	-0.078 + -0.381 **	0.166 ** 0.578 **

\*\*  $p < .01$ , +  $p < .10$

注) 上段はWithinレベル, 下段はBetweenレベルの相関係数である。

また、モデル3に含まれるPWLE-DとNWLE-Dの対とPWLE-RとNWLE-Rの対の各々は関連する感情価が異なるペアである。ただし前者は両方とも開示行動、後者はいずれも応答行動であるため、各行動の背景には共変動が認められると推測された。さらにPWLE-DとNWLE-Rの対とNWLE-DとPWLE-Rの対の各々も関連する感情価が異なるペアである。ただ

し、両ペアとも一方は開示行動で他方は応答行動であるため相対する関係にあり、各ペア間にも共変動が認められると推測した。よって共変動が推測される概念間についてマルチレベル相関分析を実施した。その結果、3職種のどの相関係数においても同等の相関関係が示され、Within, Betweenの両レベルで有意な正の相関関係が認められた。表4では全職種データによる相関係数を掲載した。

表4 モデル3で共変動が推測された概念間のマルチレベル相関係数

	NWLE-D	NWLE-R
PWLE-D	0.273 ** 0.662 **	0.332 ** 0.813 **
PWLE-R	0.275 ** 0.688 **	0.502 ** 0.914 **

\*\*  $p < .01$

注) 上段はWithinレベル, 下段はBetweenレベルの相関係数である。

### 3.2 分析と検討の枠組

本調査では対人援助職者である3職種よりデータを取得した。ただしマルチレベル相関分析の結果から、各モデルのパラメータ推定値は職種によって変化しないと予測された。よってパス係数を含む全てを職種間で等値制約してMSEM分析(ロバスト最尤法)を行った。本研究では等値制約のもと算出されたパス係数(非標準化係数)と、各パス係数を掛け合わせた間接効果に着目して検討を進めた。以下では、まずモデル1, 2の分析結果について取り上げ、次にモデル3の分析結果を検討する。

### 3.3 モデル1, 2の影響関係

MSEM分析の結果、モデル1で  $\chi^2(48) = 58.928, n.s., RMSEA = 0.031, CFI = 0.982,$

SRMR = 0.069 (Within), 0.097 (Between), モデル2では  $\chi^2(48) = 58.470, n.s., RMSEA = 0.030, CFI = 0.974, SRMR = 0.058$  (Within), 0.068 (Between) となりモデル1, 2のデータへの適合度は十分であった。

算出されたパス係数を図2に、間接効果を示す値は表5に掲載した。なお、分析結果においてPWLE-DとPWLE-Rの各々からPAに対するパス係数と、NWLE-DとNWLE-Rの各々からNAへのパス係数はWithin, Betweenの両レベルとも有意ではなかった。いずれもPWLEまたはNWLEを媒介する影響関係と他の概念との相関関係によって説明されたと考え、以後では議論しない。

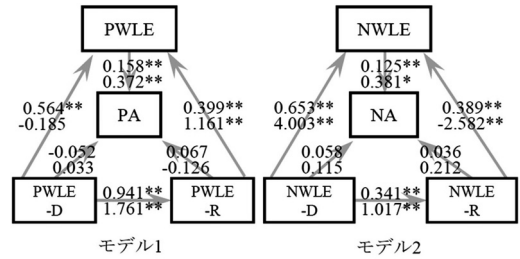


図2 モデル1, 2におけるMSEM分析によって算出されたパス係数。

注) 付記したパス係数において、上段はWithinレベル、下段はBetweenレベルの値を示す。パス係数はすべて非標準化係数である。  
\*\*  $p < .01, * p < .05$

表5 モデル1, 2, 3における間接効果の値

	PWLE-D→PWLE →PAまたはうつ	PWLE-D→PWLE-R →PWLE→PAまたはうつ	NWLE-D→NWLE →NAまたはうつ	NWLE-D→NWLE-R →NWLE→NAまたはうつ
モデル1	0.089 ** -0.069	0.059 ** 0.761 **	— —	— —
モデル2	— —	— —	0.081 ** 1.525 +	0.017 ** -1.000 +
モデル3	-0.063 * —	-0.043 * -0.807 **	0.110 ** 2.986 **	0.022 + -1.934 **

\*\*  $p < .01, * p < .05, + p < .10$

注) 上段はWithinレベル、下段はBetweenレベルの値である。それぞれの間接効果を構成する最後の概念はモデル1ではPA、モデル2ではNA、モデル3ではうつとなる。なおモデル3でBetweenレベルの「PWLE-D→PWLE→うつ」の値はモデル1の分析結果を踏まえて分析していない。

### 3.3.1 モデル1

初めにWithinレベルではモデル1で仮定した影響関係を支持する有意なパス係数が算出された。したがって、対人援助職者内の日常的傾向としてPWLE-Dの体験頻度を高いと評定すればPWLEは想起されやすくなり、PWLEの体験頻度を高く評定したと考える。また、その結果としてPAの体験頻度も高いと評定したと推察す

る。さらに同じく対人援助職者内の日常的傾向として、PWLE-Dの体験頻度を高いと評定するとPWLE-Rの体験頻度も高いと評定してPWLEの想起性が増し、かつその感情価はよりポジティブに評価されてPWLEの体験頻度を高いと評定したと考える。そして結果的にPAの体験頻度も高いと評定したと推察する。なお、PWLE-DからPWLEを媒介してPAに影響を与える

間接効果と、PWLE-DからPWLE-RおよびPWLEを媒介してPAに影響する間接効果を分析した結果、両者の値はいずれも正で有意となった。この結果からも上記の考察は妥当と考える。

次に、BetweenレベルではPWLE-DからPWLEへのパス係数以外はモデル1で仮定した影響関係を支持する有意なパス係数が得られた。したがって対人援助職者間の集団的傾向として、PWLE-Dの体験頻度を高いと評定すればPWLE-Rの体験頻度も高いと評定してPWLEは想起されやすくなり、かつその体験はよりポジティブに評価されて、PWLE、さらにはPAの体験頻度を高いと評定したと考える。PWLE-DからPWLE-RおよびPWLEを媒介してPAに影響する間接効果の値は正で有意であった。このことから以上の検討は妥当と思われる。さて、BetweenレベルにおいてPWLE-DからPWLEへの影響関係を示すパス係数は有意ではなかった。よって対人援助職者間の集団的傾向として、PWLE-Dの体験頻度を高いと評定するとPWLEへの想起性が向上して、PWLE体験の頻度も高いと評定するという推測は支持されなかった。なお表2より同レベルのPWLE-DとPWLEの相関係数は正で有意であった。またPWLE-DからPWLE-Rを介してPWLEに至るまでの各パス係数も正で有意であることから、PWLE-DからPWLEへの影響関係はPWLE-Rを媒介する影響関係によって説明されたと考える。つまりBetweenレベルでのPWLE-DがPWLEの想起性に及ぼす影響は、PWLE-Dに対するPWLE-Rの体験頻度の評定によって決定されると推察する。

### 3.3.2 モデル2

MSEM分析より、モデル2で仮定したWithinとBetweenの両レベルの影響関係を支持する有意なパス係数が得られた。初めにNWLE-

DからNWLEを媒介してNAに至るまでのパス係数から、NWLE-Dの体験頻度を高いと評定すると、開示されたNWLEは再喚起されて印象が強まり、その体験頻度、ならびにNAの体験頻度も高いと評定したと推察する。また、このような傾向は、対人援助職者内の日常的傾向と対人援助職者間の集団的傾向の両方で認められると考える。上記のパス係数から算出された間接効果の値は両レベルとも正で、有意または有意傾向であった。この結果も上記の考察の証左といえる。

次に、NWLE-DからNWLE-RさらにNWLEを媒介してNAに至る各パス係数より、Withinレベルの対人援助職者内の日常的傾向として、NWLE-DおよびNWLE-Rの体験頻度を高いと評定するとNWLEの内容を再認識したため、NWLEはよりネガティブに感じられ、その体験頻度を高いと評定したと推察する。そして最終的にNAの体験頻度も高いと評定したと考える。一方、Betweenレベルである対人援助職者間の集団的傾向としては、NWLE-DとNWLE-Rの体験頻度を高いと評定するとNWLEをネガティブな感情体験として認知することが少なくなり、NWLEの体験頻度は低いと評定したと考える。結果として、NWLEと正の影響関係にあるNAの体験頻度も低いと評定したと推察する。上記で取り上げた各パス係数による間接効果の値は、Withinレベルは正で有意、Betweenレベルでは負で有意傾向となった。このことから以上の検討は妥当と考えられる。

### 3.4 モデル3の設定および影響関係

モデル1とモデル2の分析結果を基礎にして図3にモデル3を構成した。ただし、モデル1の分析において有意では無かったBetweenレベルのPWLE-DからPWLEのパスは設定しなかった。また、モデル3はモデル1、2のPAとNAをうつに置きかえて構成されたため、

PWLE-DとPWLE-R, およびNWLE-DとNWLE-Rの各々からうつに対するパスも設定可能であった。しかしモデル1, 2の分析結果においてPWLE-DとPWLE-RからPAへのパス, さらにはNWLE-DとNWLE-RからNAに対するパス係数は両レベルとも有意ではなかった。したがってモデル3でこれらのパスは設定しなかった。なおマルチレベル相関分析の結果(表4)を考慮してPWLE-DとNWLE-Dの間と, PWLE-RとNWLE-Rの各々の誤差変数の間に共分散のパスを設定し, 加えてPWLE-DとNWLE-Rの誤差変数の間と, NWLE-DとPWLE-Rの誤差変数の間にも共分散のパスを設定した。

モデル3について職種間でパス係数等の全パラメータ値を等値制約したMSEM分析(ロバスト推定法)を行った。その結果,  $\chi^2(145) = 214.512$ ,  $p < .01$ , RMSEA = 0.045, CFI = 0.951, SRMR = 0.088 (Within), 0.108 (Between) となりモデル3のデータへの適合度は許容される範囲にあると判断した。算出されたパス係数(非標準化係数)は図4に示した。

このモデルで, モデル1, 2でも取り上げたパスの係数は全て有意であり, それらの正負はモデル1, 2の分析結果と同じであった。PWLE, NWLEからうつに対するパス係数も全て有意であり, 仮定されたWithinとBetweenレベルの影響関係を支持していた。

また, モデル1, 2で取り上げた間接効果について, モデル3ではPAとNAをうつに代えて分析した。算出された間接効果の値は表5に掲載している。まずPWLE-DからPWLEを媒介してうつに影響する間接効果と, PWLE-DからPWLE-RとPWLEを媒介してうつに影響する間接効果の値は, 前者はWithinレベルで, 後者は両レベルで負となり有意であった。よってPWLE-DとPWLE-Rで構成される社会的共有

は, それらの体験頻度を高いと評定するとPWLEの体験頻度も高いと評定して, うつの体験頻度は低いと評定したと考える。さらに, この傾向は対人援助職者内の日常的傾向と対人援助職者間の集団的傾向として認められるといえる。

次に, NWLE-DからNWLEを媒介してうつに影響する間接効果と, NWLE-DからNWLE-RとNWLEを媒介してうつに影響する間接効果の値は両レベルで有意もしくは有意傾向であり, それらの正負はモデル2のNAに影響する間接効果の正負と一致した。したがって, まずNWLE-DとNWLEの体験頻度を高いと評定すると, うつの体験頻度も高いと評定することが対人援助職者内の日常的傾向と対人援助職者間の集団的傾向として認められると考える。一方, NWLE-DとNWLE-R, NWLEの体験頻度を高いと評定すると, 対人援助職者内の日常的傾向としてはうつの体験頻度を高いと評定するが, 対人援助職者間の集団的傾向としてはうつの体験頻度を低いと評定したことが推察される。

最後に, 共分散のパス係数はNWLE-DとPWLE-Rの誤差変数の間で有意では無かった。ただし, その他は有意となり, また全パス係数の符号はマルチレベル相関係数と同じ正になった。なお共分散のパスを設定せずにMSEM分析を行うと  $\chi^2(153) = 540.774$ ,  $p < .01$ , RMSEA = 0.103, CFI = 0.728, SRMR = 0.190 (Within), 0.355 (Between) であった。さらに上記のカイ2乗値と, 共分散のパスを設定した分析時のカイ2乗値を用いてサトラ・ベントラーの $\chi^2$ 値による尤度比検定を行った結果,  $\Delta \chi^2(8) = 37.868$ ,  $p < .01$ となった。以上よりモデル3で共分散のパスを設定するのは妥当と考えられた。



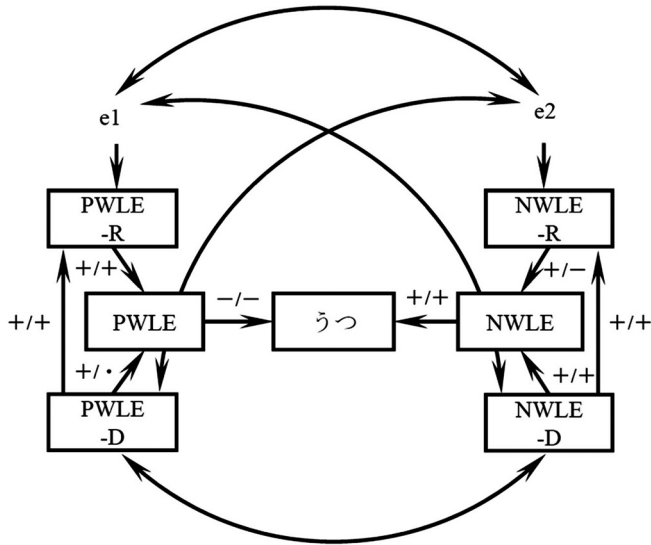


図3 PWLE-D, PWLE-R, またはNWLE-D, NWLE-Rの社会的共有が, PWLE またはNWLE, そしてうつに与える影響をWithinとBetweenレベルで仮定したモデル3。

注) 各パスに付記された「+」は正の影響関係, 「-」は負の影響関係を仮定していることを示す。「/」をはさみ左側はWithinレベル, 右側はBetweenレベルの仮定を表す。

なおPWLE-DからPWLEに対するBetweenレベルのパスは設定していない。e1, e2は各概念の誤差変数を表す。

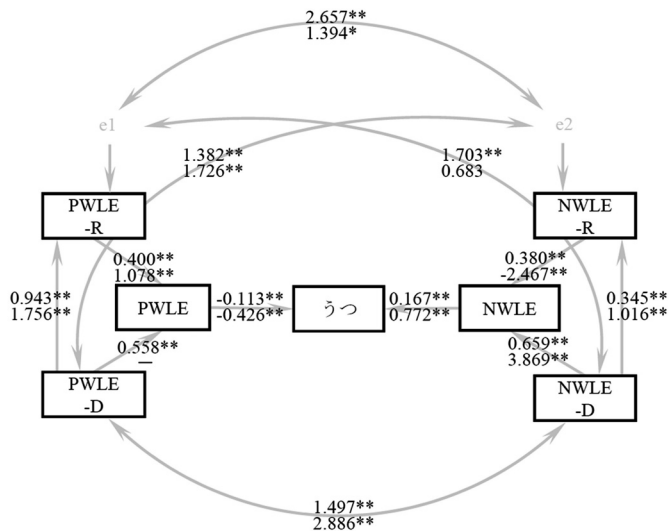


図4 モデル3におけるMSEM分析によって算出されたパス係数。

注) 付記したパス係数において, 上段はWithinレベル, 下段はBetweenレベルの値を示す。なおパス係数は全て非標準化係数である。

\*\*  $p < .01$ , \*  $p < .05$

#### 4 結 論

本研究ではモデル1, 2, 3を通してPWLE-D, PWLE-Rと, NWLE-D, NWLE-Rで構成される社会的共有がPAとNAおよびうつに与える影響をWithinとBetweenのマルチレベルに分けて分析, 検討した。

その結果, 第1に, PWLE-DとPWLE-Rで構成される社会的共有はWithinとBetweenの両レベルで対人援助職者のPA, NAとうつの状態に影響する傾向が明らかになった。まずWithinレベルである対人援助職者の個々の日常において, PWLE-DおよびPWLE-Rをより多く体験すると, PAの状態は高まり, うつ状態は低くなる傾向が示された。さらに同レベルではPWLE-Dをより多く体験するだけでもPAの状態は高まり, うつ状態は低くなる傾向が示された。またBetweenレベルにあたる対人援助職者の集団において, PWLE-DおよびPWLE-Rをより多く体験した者は, より少なく体験した者に比べて, PAの状態は高くなり, うつ状態は低くなる傾向が示唆された。

第2に, NWLE-DとNWLE-Rからなる社会的共有もWithin, Betweenの両レベルで対人援助職者のNAおよびうつの状態に影響する傾向が明らかになった。ただし, その傾向はNWLE-Rを媒介する時にレベル間で異なることも明らかになった。初めに, NWLE-Rを媒介しない時は, 個々の日常レベルでNWLE-Dをより多く体験するとNAとうつの状態は高まる傾向が示された。さらに集団レベルにおいてもNWLE-Dをより多く体験した者は, それをより少なく体験した者に比べて, NAとうつの状態が高くなる傾向が示された。一方, NWLE-Rを媒介する時には, 日常レベルではNWLE-DとNWLE-Rをより多く体験すると, NAとうつの状態は高まるが, 集団レベルではNWLE-DとNWLE-Rをより多く体験した者は,

より少なく体験した者に比べ, NAとうつの状態が低くなる傾向が示唆された。以上はNWLE-DとNWLE-Rの結果, 対人援助職者内の日常レベルではNAとうつ状態が高まるように体験されるが, その状態の集団内での平均的位置づけは低くなることを示している。

本研究では対人援助職者の日常的体験および行為として感情体験の社会的共有を取り上げた。この日常的体験, 行為としての側面に焦点を絞って社会的共有の影響を捉えるならWithinレベルの結果が該当するといえる。ここで社会的共有がPAとNAに与える影響に着目すると, WithinレベルにおいてはPWLEまたはNWLEを開示し, 応答されると, 個々の対人援助職者の日常ではPAとNAの状態は高まる傾向が認められた。ただし, この傾向はBetweenレベルである対人援助職者集団での傾向と一致しない場合があり, 具体的にはNWLEを開示し, かつ応答されるBetweenレベルの社会的共有場面では, Withinレベルとは反対のNAの状態を低くする傾向が確認された。NWLE-Rを媒介する社会的共有がNAの状態に与える影響にレベル間で違いが認められるのは留意すべき点であるといえよう。

今後の課題について記す。第1に, 本研究ではPWLEなどの社会的共有に関する各概念を調査するために, それらの測定項目を新しく作成した。そのためこれらの項目の妥当性は十分に検証されているとはいえない。今後は各項目の妥当性を検証しつつ, 上記の研究結果を追試する必要がある。第2に, 本研究ではPWLE等の各概念で想定された因子または領域は区別せずに分析を進めた。しかし, それぞれを区別して組み合わせることで, より詳細に分析されると思われる。特にNWLE-Rを媒介する社会的共有においては, NWLE-Rの領域別にその影響をMSEM分析することで, 以上で認められたレベル間の違いが詳しく検討されると考える。

第3に、今回の研究では対人援助職者の日常的傾向、および対人援助職者間の集団的傾向の二つのレベルに着目して社会的共有がPA, NA, そしてうつに与える影響について研究を進めた。ただし、より上位のレベルである対人援助職者が所属する事業所や地域の特性も取り上げることで社会的共有の影響は効果的に分析可能であるといえる。第4に、本研究で社会的共有のモデル1, 2, 3をMSEM分析する際には、対人援助職者として取り上げた看護師、介護福祉士、保育士の3種間で算出されるパラメータ推定値に差は無いと仮定した。この仮定はMSEM分析で算出された適合度指標によって支持されている。しかしながら、これら3職種は専門性の異なる職種でもある。したがって、例えば本研究のモデルを職種ごとにMSEM分析することで、各職種の専門性が反映された有益な知見も得られると考える。最後に、本研究の応用可能性について述べる。まず、PWLE-DとPWLE-Rで構成される社会的共有については、対人援助職者の個々の日常レベル、そして対人援助職者間の集団レベルにおいても「PWLEのエピソードを職場で開示し、応答されることをより多く体験させる」という共通の取組がうつ状態の低減、さらにはうつと関連が深いとされるバーンアウト<sup>30)</sup>の低減にも貢献すると考える。一方、NWLE-DとNWLE-Rで構成される社会的共有については「NWLEのエピソードを職場で開示し、応答されることをより多く体験させる」取組が個々の日常レベルにおいてうつおよびバーンアウトの体験を増大させる可能性がある。ただし、個々が所属する集団においては、上記の取組がその集団におけるうつおよびバーンアウトの平均的な体験を低減させることも分析結果から予測される。このようにNWLE-DとNWLE-Rの社会的共有の効果は日常レベルと集団レベルで違いがあるため、この違いをふまえた個々と集団へのアプ

ローチが必要になると思われる。

## 謝 辞

本研究は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）、課題番号26380979）の助成を受けた。

## 参考文献

- 1) 厚生労働省：第4回人材不足分野等における人材確保・育成対策推進会議 資料. 2014, <http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/0000055423.html> (2019.8.24)
- 2) 小山敦子, 保田佳苗, 仁木稔, 山藤緑, 平野智子, 陣内里佳子, 岩上芳, 長野京子：医療・教育・福祉関係者は疲れている－ケアを供与する側のメンタルヘルス－ 心身医学 43:679-688, 2003
- 3) Hochschild A : The Managed Heart: Commercialization of human feeling. Berkeley, England, University of California Press. 1983
- 4) 荻野佳代子, 瀧ヶ崎隆司, 稲木康一郎：対人援助職における感情労働がバーンアウトおよびストレスに与える影響. 心理学研究 75:371-377, 2004
- 5) 土井裕貴：対人援助職におけるバーンアウト・感情労働の関係性－精神的な疲労に着目する意義について－ 大阪大学教育学年報 19:83-95, 2014
- 6) 趙正祐：児童養護施設の援助者支援における共感満足・疲労に関する研究－CSFの高低による子どもの関わり方の特徴から－ 社会福祉学 55:76-88, 2014
- 7) 関谷大輝, 湯川進太郎：対人援助職者の感情労働における感情的不協和経験の筆記開示. 心理学研究 80:295-303, 2009
- 8) 厚生労働省：チーム医療の推進について（チーム医療の推進に関する検討会 報告書）. 2010,

- <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/s0319-9.html> (2019.8.24)
- 9) 野本茂夫: 保育者が保育のゆきづまりを乗り越えるとき－保育実践における保育者相互の支え合いの意味－ 保育学研究 46:53-64, 2008
  - 10) 山口麻衣, 山口生史: 介護施設におけるケアワーカー間の協働－組織内ケアチームに着目した分析－ ルーテル学院研究紀要: テオロギア・ディアコニア 43:35-48, 2009
  - 11) Rime B, Finkenauer C, Luminet O, Zech, E, Philippot P : Social sharing of emotion: New evidence and new questions. In European Review of Social Psychology Vol. 9 (Stroebe W, Hewstone M eds.). Chichester, UK, John Wiley & Sons Ltd. 1998, pp145-189
  - 12) Rime B, Mesquita B, Philippot P, Boca S : Beyond the emotional event: Six studies on the social sharing of emotion. Cognition and Emotion 5:435-465, 1991
  - 13) Rime B : Emotion Elicits the Social Sharing of Emotion: Theory and Empirical Review. Emotion Review 1:60-85, 2009
  - 14) Bryant FB, Chadwick ED, Kluwe K : Understanding the Processes that Regulate Positive Emotional Experience: Unsolved problems and future directions for theory and research on savoring. International Journal of Wellbeing 1:107-126, 2011
  - 15) Langston CA : Capitalizing on and coping with daily-life events: Expressive responses to positive events. Journal of Personality and Social Psychology 67:1112-1125, 1994
  - 16) Gable SL, Reis HT : Good news! Capitalizing on Positive Events in an Interpersonal Context. Advances in Experimental Social Psychology 42:195-257, 2010
  - 17) Watson D, Kendall PC : Understanding anxiety and depression: Their relation to negative and positive affective states. In Anxiety and Depression: Distinctive and overlapping feature (Kendall, PC, Watson, D, eds). San Diego, USA, Academic Press. 3-26, 1989
  - 18) 森本寛訓, 神田有希恵, 長田久雄: 対人援助職者の感情状態と関連する職業生活出来事の検討 ヒューマン・ケア研究 12:35-51, 2011
  - 19) Gable SL, Reis HT, Impett EA, Asher ER : What do you do when things go right? The Intrapersonal and interpersonal benefits of sharing positive events. Journal of Personality and Social Psychology 87:228-245, 2004
  - 20) Reis HT, Smith SM, Carmichael CL, Caprariello PA, Tsai FF, Rodrigues A, Maniaci, MR : Are You Happy for Me? How Sharing Ppositive Events With Others Provides Personal and Interpersonal Benefits. Journal of Personality and Social Psychology 99:311-329, 2010
  - 21) Pennebaker JW : Opening up: The healing power of expressing emotions (Rev. ed). New York, USA, Guilford Press. 1997 (余語真夫 (監訳): オープニングアップ－秘密の告白と心身の健康－. 京都, 北大路書房. 2000)
  - 22) 佐藤徳: 筆記開示はなぜ効くのか?－同一体験の継続的な筆記による馴化と認知的再体制化の促進－ 感情心理学研究 19:71-80, 2012
  - 23) Nils F, Rime B : Beyond the myth of venting: Social sharing modes determine the benefits of emotional disclosure. European Journal of Social Psychology 42:672-681, 2012,
  - 24) Morimoto H, Inada M : Depression among human care service professionals and positive/negative work life events: a structural equation modeling analysis. Kawasaki Medical Journal 44:53-60, 2018
  - 25) 水本篤, 竹内理: 研究論文における効果量の報告のために－基礎的概念と注意点－ 英語教育研究 31:57-66, 2008



- 26) 佐藤徳, 安田朝子：日本語版PANASの作成  
性格心理学研究 9:138-139, 2001
- 27) 島悟, 鹿野達男, 北村俊則, 浅井昌弘：新しい  
抑うつ性自己評価尺度について 精神医学  
27:717-723, 1985
- 28) 清水裕士：個人と集団のマルチレベル分析. 京  
都, ナカニシヤ出版. 2014
- 29) 清水裕士：フリーの統計分析ソフトHAD-機  
能の紹介と統計学習・教育, 研究実践における  
利用方法の提案- メディア・情報・コミュニ  
ケーション研究 1:59-73, 2016
- 30) Meier ST : The construct validity of burnout.  
Journal of Occupational Psychology 57:  
211-219, 1984
- 31) 藤岡孝志：共感疲労の観点に基づく援助者支援  
プログラムの構築に関する研究 日本社会事業  
大学研究紀要 57:201-237, 2011

